

1 JSL カリキュラム「社会科」(中学校編)の基本的な考え方

1-1 JSL カリキュラム「社会科」のねらい

(1) JSL 生徒の「社会科」における困難の背景

日本語を第二言語として学ぶ生徒(以下、JSL 生徒)は、「社会科」の学習に大きな困難を感じていると言われる。一般的に日本での生活経験が短く、日本社会についての知識が豊かとは言いにくい JSL 生徒にとって、日本の地理、歴史、公民の内容の多くが、「ゼロ」からの学習となる場合が少なくない。また、社会科で学ぶ知識や概念を表すことばは、日常生活で用いることばとは大きく異なる。そのため、日常的な会話ができたとしても、社会科の学習内容を理解するのはたやすいことではない。こうした困難の要因を、十分に考慮した支援が求められる。

(2) 身に付けさせたい力

社会科の学習では、地理、歴史、公民、それぞれの見方・考え方を育むために、社会的事象を取り上げて学習が進められる。そこでは、事象についての知識を網羅的に覚えるのではなく、事象を巡る様々な課題の探求活動が営まれる。JSL 社会科では、こうした見方・考え方を育む探求型の学習に参加するための力を育むことねらいとする。それには、JSL 生徒の社会科学学習経験や日本語の力を十分に考慮して作られた探求型の学習に参加する経験が重要である。それによって、探求型の学び方を知ると同時に、社会科の基礎的な知識や学習スキルと、その知識やスキルを活用するための日本語の力を高める。それが、在籍学級での学習への参加のための手がかりになるのである。

(3) 教科の特性を生かした授業

JSL 生徒の学習参加を促す上では、社会科という教科の次のような特性を十分に利用することが鍵となる。社会科では、地図や主題図、図表、映像・写真など、多くの資料を利用し、社会的事象に対する理解を深めていく。また、そうして探求したことを、ことば以外にも多様な方法で表し、再構成するという学習活動が行われる。この点で、生徒が情報処理のスキルを身に付けていれば、ことば(日本語)以外の媒体を通して多くの情報が得られるであろう。また、体験的、操作的な活動を通して、情報を処理したり再構成したりする授業では、日本語が不十分であっても、学習への参加が可能となる。こうした学習参加経験を重ねて、JSL 生徒は学習スキルを高め、ことばを発達させる。そして、社会的事象に対する見方・考え方を形成していくと考えられる。また、題材として、どのような社会的事象を取り上げるかによって、母国との関連づけや比較ができる可能性がある。それは、生徒から、母国での学習を通して得た知識や経験を引き出し、理解を助けるであろう。

(4) JSL 生徒のための授業作り

「社会科の探求型の学習に参加する力」を育むためには、第一に、社会科の学習経験

や身に付けているスキル、日本語の力といった点から、対象の生徒の実態を把握することが重要となる。次に、その生徒にとってどのような学習が、社会的事象をとらえる見方・考え方を育むために適した内容なのか、その学習を進めるに当たってどのような学習スキルが求められるのかを見極めることが必要である。ここで、社会科としての目標設定が行われるわけであるが、同時に、この学習を通して身に付けさせたい日本語のスキルをも、目標として明確にすることが重要である。この目標達成のために、社会科の内容の学習と、その内容を表わす日本語の学習を統合した授業作りが必要である。

1-2 JSL カリキュラム「社会科」の位置づけ

JSL 生徒への日本語教育における JSL カリキュラム「社会科」の位置づけについて、対象とする生徒、実施の場、在籍する学級の授業との関連という3点から述べる。

(1) 対象生徒

○日本語の力として、次のような力を有する生徒を想定している。

ただし、日本語の力だけではなく、社会科学学習に求められる情報処理や情報の再構成のスキル、思考力や洞察力等を総合的に把握し、可能であれば、できるだけ早い段階から、教科の内容についての学習を始めることを奨励する。

- ・日常的な会話や具体的な内容についての口頭でのコミュニケーションができる
- ・文字については、ひらがな・カタカナの読み書きができる。ただし、漢字の知識・技能については漢字圏か非漢字圏かによって大きく異なるが、その点で対象を限定することはしない。
- ・読み書きの力に関しては、口頭表現に近い短い文章であれば、読んで大まかな意味をつかむことができ、提示された語彙や文型などを利用しながら、短文をつなぎ合わせて簡単な文章が書ける。

○社会科の学習経験に関しては、特には限定しない。

対象となる生徒の生活経験や社会科学学習経験を考慮して、授業を組み立てることが肝要だと考える。授業を設計するに当たっては、日本で、あるいは出身国での社会科学学習の経験や、学習スキルの有無を把握することが重要となる。その経験・知識、スキルに合わせて、授業を組み立てる。なお、中学校の内容の学習をする前に、より基本的な内容の学習やスキルの育成が必要な生徒に対しては、小学校の社会科の学習内容を取り上げて授業を展開することが適当であろう。その場合、JSL カリキュラムの小学校編を参照されたい。

(2) 実施の場

まず、学校を想定し、在籍学級での社会科の授業と、日本語学級等での取り出しの授業において実施することを想定した。在籍学級では、通常社会科の学習への参加を促す支援を行う。そして、取り出しの学級では、在籍学級の学習内容の一部を JSL 生徒に合わせて組み立て直して授業を実施する。

ただし、実施の場を学校に限定するわけではなく、支援を行う者も学校の教師に限定

するものではない。できるだけ多くの場で、支援活動をしている多くの人に多様な形で利用いただきたい。

(3) 在籍学級の学習との関連

JSL 社会科の授業をいかに作っていくかを考えるに当たり、まず、学習と在籍学級での社会科の学習との関係について、検討した。取り出しの日本語教室と在籍学級での学習との関係は、概ね次の4つのパターンに集約される(図1)。

<図1 在籍学級と取り出し学級で実施される学習の関係>

ア

在 籍 学 級

イ (取)

在 籍 学 級

※取り出しの学習は、必ずしも最初の段階に位置づけられるとは限らず、途中で、あるいは終わりの方で行われる場合もある。

ウ (取) [在] (取) [在] (取) [在]

エ (取り出し)

今回、JSL 社会科では、この中の「イ」のパターンを想定して、カリキュラムを構想した。つまり、単元の学習の一部分を取り出しで学習するというものである。取り出しの授業で行う学習が、在籍学級の学習展開のどの段階になるかは、状況によって異なるが、一般的な場合は、単元内容を概観するか、基本となる学習内容の学習を行うか、あるいは社会科の見方考え方を育む上で重要度の高い概念を学習することが有効だと考えられる。

単元全体の学習の中から、特定の内容を切り出して学ぶ方法は、学習が断片的なものとなりがちであり、社会科本来の目標を達成することは難しいと考えられる。しかし、断片的であったとしても、取り出しの学習で得たものは、その後の学習の手がかりとなり、在籍学級での内容理解に結び付く。また、取り出しの授業で学んだ部分的な知識やスキルが在籍学級での学習に結び付き、その単元で目標とする概念の形成へと発展することが期待される。こうした成果を得るためには、在籍学級においても、通常の授業の中で JSL 生徒への学習参加のための様々な支援が必要となる。

1-3 授業の基本構造

(1) 学習内容の単元化について

ここまで述べてきたように、取り出しの授業では、在籍学級の「社会科」学習の一部を切り出して授業を行うことを前提とする。当然、学習内容の切り出し、つまり選択に

は、対象となる生徒の学習経験や知識、学習スキルを十分考慮することが求められる。同時に、社会科の概念を形成するのに適した「まとまり」で、選択することが重要である。そこで、JSL 社会科では、目安となる学習のまとまりを提案することにした。それが、JSL 社会科の学習单元である。

学習指導要領の内容構成を基に、「地理」「歴史」「公民」の各分野の内容を、次の三つの視点で、学習のまとまりとして单元化した。

①社会科の学習における困難性への配慮

JSL 生徒の実態に基づき、取り上げる内容については、絞り込みが必要である。網羅的に内容を取り上げることは現実的ではない。日本語が不十分であっても操作的、体験的な活動を通して理解しやすい内容であること、そして対象の生徒にとって、重要だと思われる知識や概念を形成するのに相応しい内容のまとまりであることが求められる。

②教科目標との関連から

JSL 社会科では、社会科が目標とする、社会的事象に対する見方・考え方を育むことをねらいとしている。見方・考え方を育むためには、細かな知識レベルの内容を断片的に学ぶのではなく、一定の脈絡のあるまとまりとして学習を構成することが大事である。

③取り出しの授業における実施という点から

在籍学級の学習との関連については、1-2(3)で述べたが、在籍学級の学習の一部分を切り出して取り出しの学習で行うとすると、在籍学級とほぼ同じ大きさで单元化することや、内容の一部を切り出しやすい括り方で組み立てられていることが前提となる。

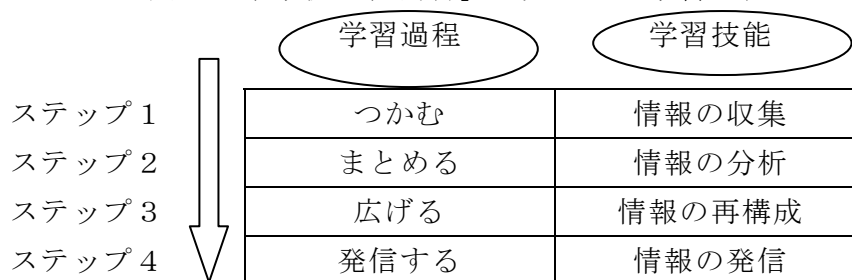
以上の3点から検討した結果が、「学習单元一覧」で示した学習单元である。学習单元一覧で社会科の学習内容の全体像を把握し、JSL 社会科で取り上げる学習内容を選択するときの目安として利用していただきたい。

(2) 授業展開の基本パターン

社会科の各分野の学習内容は大きく異なる。また、地理・歴史の知識・技能を土台にして公民の学習がその上に位置づく構造（Ⅱ型構造）となっている。そのため、分野によって扱う資料、資料の処理の仕方、分析の視点、求められる意思決定や判断の仕方が異なる。つまり、求められる学習スキルが異なる。

しかし、次の4つのステップをもって授業が構成されている点は、3つの分野に共通している。学習過程としては「つかむ→まとめる→広げる→発信する」という流れである。各過程における学習技能の点から見れば「情報収集→情報分析→情報再構成→情報発信」という展開となっている（図2）。

<図2 中学校「社会科」に見られる学習過程>



JSL 社会科では、この4つのステップを学習単元の授業展開の基本構造とした。その各過程に関して、在籍学級での学習参加を促すための支援を提案する。そして、その過程の一部を、取り出しの授業で実施する場合の、授業作りについて考えることにした。

1-4 支援の基本的な考え方

(1) 学習支援の視点

①生徒の社会生活経験や社会科の学習経験との関連付け

生徒の既存の知識、経験に照らし、学習単元の内容を、生徒にとってまったく新しいものなのか、あるいは新しいスキルが必要となるのか、これまでの経験や知識を活かして学習できるものなのかといった点から、とらえることが重要である。その結果に基づき、学習のための資料や教材を選定して再構成すること、必要なスキル育成のための学習活動を組み入れること、その生徒の理解の道筋にあわせた学習展開を工夫することが求められる。例えば、生徒の母国の地理や歴史に関連づけることや、生徒が身近に感じられる社会的事象（出来事）を題材にするなどの工夫が必要であろう。また、学習スキルの強化が必要であれば、資料や主題図の見方の指導やそのスキルの訓練を、授業に組み入れるということも有効であろう。

②スモールステップの設定とキーワードの選定

各単元を構成する主要な事柄を明確化することが、授業作りのヒントになる。それは、授業で取り上げる内容の絞り込みや、目標の焦点化の目安となる。同時に、スモールステップで学習を展開する場合の、ステップの幅の指標にもなる。そこで、JSL 社会科では、各学習単元に、「具体的な学習内容」と「よく取り上げられる事柄」を示した。また、各活動事例には、取り上げた学習内容のキーワードを上げてある。これは生徒にとって、情報を処理したり、理解したことを表現したりする（再構成する）ためのキーワードである。視点を変えれば、生徒の理解の状況を把握する場合に、確認すべき知識や概念でもある。

③「具体⇔抽象」をつなぐ半抽象物の利用

JSL 生徒の日本語の不十分さや経験の違いを考えると、ことばによる説明のみで概念を理解することは困難である。情報収集・分析・再構成のプロセスで、「具体」的な事象と「抽象」概念とがつながるようにするための仕掛が必要である。その一つの手だて

として、写真や絵、図やグラフなどの半抽象物の利用が有効であると考えられる。これらによって得られる個別の情報を理解し、具体のレベルで整理、統合する操作活動を通して、その背景にある規則性や関連性を見つけていくことが可能となる。そうして理解されたことを、知識や概念として日本語で表す。あるいはその逆に、抽象的な概念については、いくつかの具体のデータの処理活動を通してその意味をとらえさせていく。こうした半抽象物を利用した活動を段階的に経験させる、つまり学習のスマールステップ化を行って授業を展開することが、内容理解、概念形成を促すと考えられる。

④ワークシートの活用

ワークシートは、学習の各ステップで学習参加を促すリソースとして位置づける。つまり地図の作業や情報の読み取り活動などの学習プロセスで、その活動を手助けするための道具・ヒントとして、ワークシートを利用させる。

また、ワークシートに、学習プロセスの記録と、今後の学習を見通すための材料という性格を付す。それによって、予習復習（復習が中心になるだろうが）が可能になる。

活動例には、ワークシートの開発と活用のし方を例示した。参照いただきたい。

⑤リソース（教材や教具など）の準備

生徒の言語的文化的な背景の多様性や学習の進度、学習環境の違いに対応できるように、学習のためのリソース（教材や教具など）を豊かに準備することも重要である。その生徒のその時の状況に応じて、選択したり、加工したりして利用することが望まれる。

活動例にも、教材・教具の例とその利用方法を示してある。

（2）授業作りと「学習支援・日本語支援」

JSL 社会科では、生徒への学習支援・日本語支援として、二つの場を想定する。一つが、在籍学級における授業であり、もう一つが取り出しの授業である。

①在籍学級における支援

在籍学級の社会科の授業では内容や展開そのものを、JSL 生徒のために変更することは、現状では難しい。しかしながら、上記（1）の視点で授業中の支援を行うことによって、JSL 生徒の学習参加の可能性は大きく高まる。そこで、JSL 社会科では、活動例の「学習と流れと参加支援の例」において、一般学級での各学習単元の典型的な学習展開（過程）での支援例をそのヒントとして提示する。

②取り出しの授業における支援

取り出しの授業では、授業作りそのものが支援となる。支援は、学習活動やその組み立て方の工夫と、生徒の学習の困難を克服するための教育的対応という二つの層に分けて考える必要がある。授業設計上の支援と、授業中の支援である。この二つの層において、社会科学習を促すための支援と日本語の理解や表現を促すための支援を有機的に関連付けて、授業を運営することが有効である。

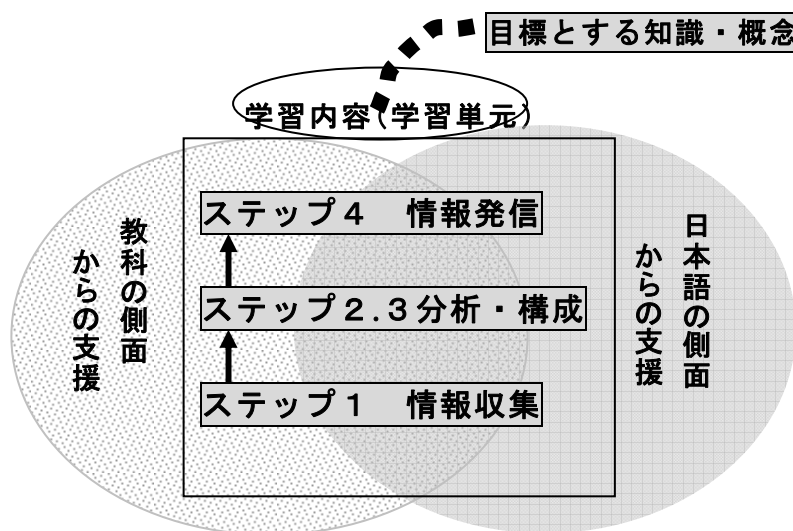
授業設計上の工夫として、学習内容を再構成することや、スキルを強化する操作的活

動を組み込むこと、活動をスモールステップ化すること、半具体物を利用した活動を位置づけることが考えられる。当然、活動に応じて適切な教材・教具を選択したり、必要な加工を施したりすることが求められる。そして、日本語の力についての配慮も必要となる。JSL 生徒の日本語力で学習参加できるように、学習内容の絞り込み、操作活動の選択、教材・教具の作成、学習ステップの幅の調整などが重要となる。また、学習参加を通して、社会科のみならず日本語の学び方が身に付き、その力が高まるように授業を設計することが理想である。

授業中の支援では、内容の理解を促すために、資料の提示方法、資料の利用方法についての指示の出し方、活動のさせ方の工夫などが必要となる。生徒の学習上の困難を予想してシミュレーションしておくことが必要であるし、困難が生じた場合には細やかに即応することが求められる。それには、生徒の参加状況や理解の度合いに応じて、教師の使用言語のコントロール（言い換え等）や、語彙・表現の導入・提示等の日本語支援を行うことが求められる。

学習支援と日本語支援の関係をイメージしたものが下の図である（図3）。なお、日本語支援の具体的な手だてについては、前章の「日本語支援について」を参照してほしい。

<図3 中学 JSL 社会における学習支援と日本語支援>



※ステップの1～4のいずれかの部分が、取り出しの授業として実施される。